

優秀賞

ぼくがかちとった全国大会

徳島県 徳島文理小学校二年 高尾 航二郎

ぼくには、ながいこと、目ひょうにしていたことがありました。それは、なつ休みのピアノコンクールで全国大会に行くことです。

ぼくにはすごいお兄ちゃんがいる、お兄ちゃんはたくさんのピアノコンクールで全国大会へ行っている、たくさんのトロフィーをもっています。ぼくは、お兄ちゃんよりトロフィーの数が少ないのがくやしくてたまりませんでした。そして、なつ休みのコンクールは、ぼくの級だと、五千以上のちやうせんしゃの中から全国大会にすすめるのは、たった八十人です。ゆめみたいなくくりです。

でも、ぼくはお兄ちゃんのおかげで、一どだけ、れんだんぶ門で全国大会にいったことがあります。その時もうれしかったけれど、ぼくは、もし、ぼく一人の力で全国大会に行けたら、もっとうれしいだろうと思いました。それで今年は、今までより、も

っときちんと作せんをたててがんばることにしました。

コンクールのかだい曲は、時だいを四つに分けて、四曲えらびます。ぼくは、たんにすきなものをえらぶのではなく、四曲つづけてひいた時に、にたような感じではなく、いろいろなふんいきが出せるような曲をえらびました。そうしたら、えらんだ曲に、左手でメロディーをはげしくひかなくてはいけないものがあって、ぼくはその曲にながい間くろうしました。手がだるくなってしまいうくらいれんしゅうしました。それでもなかなか自分で「よし」と思えるところまでし上がっていない中、よせんの日がきました。

会じょうでは、みんながぼくより上手な気がしました。とくに、耳にヘッドホンをつけて、ひざの上でピアノをひくまねをしているような人は、そうと

う上手に見えました。

ぼくは、ふあんでつぶれそうだったけれど、じゅん番がきた時、『よい音』をとくまでひびかせようとちゅういしてひきました。けっかは、よせん一いで、ヤマハしようもただけました。ぼくは、ぼくのれんしゅう方ぼうがみとめてもらえた気がしました。

そして、本せんの日。ここで二いに入らなければ全国大会にいきません。ぼくは、十本のゆび先全部に気もちをこめて、心の中でうたいながらひきました。けっかをまつ間、ぼくは、やるだけのことをやったので、おちついてまてました。はっぴょうの紙がはられたしゅん間、ぼくはふしぎなくらい、自分の名前を一しゅんで見つけました。本せん二い、全国けていです。ぼくは、なぜか、このことが分かっていたような気がしました。たぶん考えられるど力をぜんぶつかったので、おちるような気がしなかつたのです。全国大会では、ベストしようをいただきました。ぼくは言ばが見つかからないぐらいうれしかったです。ぼくは、ど力の力はすごいなと思いましたが、このことを、ぼくは一生わすれません。

